つなぐこと

広島県ケアマネマイスター
米澤一志さん

（プロフィール）よねざわ　ひとし
1965年8月11日生まれ。東北福祉大学社会福祉学科卒業。医療法人ユア・メディック在宅事業部長。「ケアプランよりしま」ケアマネジャー。3福祉士の資格をもつ。

米澤一志さん（51歳）は、2012年に始まった広島県ケアマネマイスターの認定第1号。クリニックを母体とする居宅介護支援事業所「ケアプランよりしま」で主任介護支援専門員として働く。「つなぐ」こと、サービスとサービスをつなぎ、つながっていることが、ケアマネジャーの仕事だという。

回復期と生活期を結ぶ

5月25日夜、広島市安佐南区で医療介護専門職の事例検討会が開かれた。「安佐南区回復期生活期連携推進の会」で、10年より25回目の開催になる。この日は、20年間在宅で頑張ってきた脳梗塞後遺症をもつ男性が、妻の死をきっかけに介護状況が変わり、家族のレスパイトと本人のリハビリを目的に、ショートステイの利用後に、地域包括ケア病棟への入院になったが、誤嚥や発熱を起こすようになりADLが低下したため、退院して自宅に戻った事例が話し合われた。

この勉強会を進めてきたのがケアマネマイスター第1号の米澤さん。ケアマネマイスターの生みの親、山口昇広島県地域包括ケア推進センター長は、「介護保険の柱は、ケアマネジメント確立。高齢者を在宅でみるときのケアマネジャーの役割、責務は非常に大きい。ケアマネジャー次第で、ケアマネジメントの質が決まる」と、県の機関誌で述べている。米澤さんの活動が個別のケアマネジメント活動を越えて地域に広がるのも、「つながる」という社会性を重視するためだ。「医療と介護の連携にとって、どこまでいけば完成ということはない」と話す。

勉強会では、男性は、なぜ入院してADLが低下したのかが問われた。58人の参加者は、グループワークをして、リハビリの意向をはっきり病院に伝える必要があったのでは、服用する薬によってADLが低下する場合がある、入院してADLが低下することはよくあることでその原因を探るべき、などの意見が報告された。様々な職種、立場からの意見や指摘は多職種が集まる勉強会での醍醐味。米澤さんはそのつなぎ役を担っている。

医療職は「状態をみる」が、福祉職の多くは「状態を聞く」。寝ている人に起きてもらい、動いてもらって、状態をみる医療職に対して、福祉職は家族に本人の状態を尋ねる。ケアマネジャーは、そうした医療職と介護職の特性をしっかり受け止めて、連携を図っていかなければならない、と米澤さんは言う。

ケアマネジャーは、アセスメントやモニタリングをどのように行っているか、他から評価されることが必要だ。横のつながりが薄く、ほかのケアマネジャーがどのように対処しているのか知らないままでいる人も多い。自己流のケアマネジメントをただ繰り返す。利用者や家族の要望に応えているだけでは、金太郎飴のケアプランしかできない。それならコンピューターでケアプランを作る方がよいと言われても仕方がない。その人の力を引き出して、その人らしい生活をどのように実現するのか。

よいケアマネジャーは、ケアプランのサービスを説明できる人。どのような効果があり、なぜ必要かを話すことができなければならない。本人が「できない」場合、どのようにその生活動作が「できない」かを知る。しっかり観察する目が必要だと話す。

ただ介護保険制度の中で何でもしようとするのは無理があり、地域の中に目をやる視点が必要と語った。

ケアマネの役割を伝える ケアマネマイスター

広島県　医療介護計画課
久保康行課長

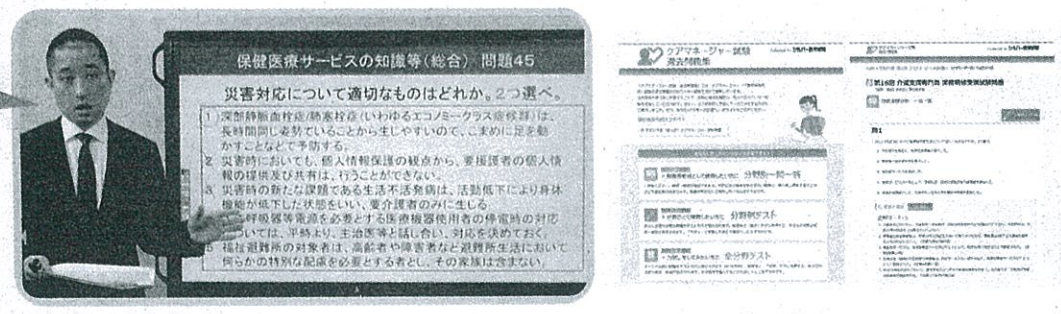
医療管理の下で介護サービスを受ける人が増えていく。ケアマネジャーは自己研鑽を積むとともに、職能集団としてレベルアップが必要。プロフェッショナルとして、社会環境の変化に対応した役割を果たさなければならない。

所属を越えて、ケアマネジャーとして専門職として高め合う。社会資源の開発もこれからは役割になっていく。地域のことを考えることもケアマネジャーに求められる。

利用者の心身状況の変化を予測して、最期まで家で過ごすためのケアマネジメントが求められている。ケアマネジャーが利用者の自己決定をしっかりと支えていく必要がある。

12年に知事認定としてスタートしたケアマネマイスターは、これまで18人を認定した。ケアマネジャーの役割をしっかりを社会に伝えていくこともケアマネマイスターの大きな役割だと思う。（談）

ー産業新聞社のオフィシャル・ウェブサイト
ww.care-news.jp
ネ試験過去問題 解答・解説公開中！
答、詳細な解説がご覧になれます！



ニュースも随時更新中！ ぜひアクセスして下さい！